小さな回心

見栄は劣等感の裏返しかもしれない。青春にかかる私の「紅頬」の時代は、見栄に苦しみ、沈淪する日々のようであった。

父の仕事のため大阪に出て、すぐに受験したのが天王寺中学であった。合格して後で金持ち学校と知って、家族があわてた。私の家は不慣れな土地で貧しさにあえいでいたから―。

学友たちとの付き合いも、この少年にとっては憂うつをいよいよ深めるばかりであった。友に招かれて行く。圧倒される応接室、上品な友の母親の接待。生活の格差の前に、私は友人がわが家へ来ることを一番恐れた。

黒い冬服は洗う度に色あせていった。私のほかに洗いざらしを着る者はなかった。見かねた母は染め上げてくれた。これでよしと思ったのもつかの間、「染めているでー、裏まで真っ黒や！」と、まくられてはやしたてられてしまった。いやな大阪弁、今でも屈辱がよみがえる。

頭も容ぼうも家も、何もかもダメな自分しか意識できないこの少年にとって、青春とは何と長い一日の連続であったことだろう。

しかし、人間は頼るべき何かを抱かないでは生きられない。神は彼にも一つそれを残していた。「俺には東大生の兄がいるぞ！」がそれだ。角帽の兄を友の前に立たせたらなあ！。しかし、兄とは遠く別れ住んでいた。

中学最後の冬休み兄がしばらく滞在した。兄の言動すべてが少年の尊敬の的で、夢のような日々、二人は中ノ島図書館に通った。最終日コーヒーのごちそう、兄が金を払うため封筒をとり出したら底が抜けて、銅貨ばかり飛び散った。あまりにも不名誉な音たてて。皆の目がいっせいに集まる。気が付くと私は出口に逃げ去っている。兄はと見ると、顔色も変えず一枚一枚拾っているではないか。

あっ！、私は叫んだ。何が恥ずかしい？、ひきょう者！、一瞬である。私は兄の傍らで拾い始めていた。カラリとした情感が胸にみなぎってくる。見栄が脱落したのだ。わが卑小（ひしょう）なる魂も、今はっきりと回心にも似た経験をしたのである。

（一九八〇年六月十一日）